

4.1.5 グローバル探究基礎

a 中学1年の取り組みの概要

私たちの暮らしと世界とのつながりを意識すること（世界の問題を自分ごとにするこ
と）、世界がよりよくあるためには自分たちはいかに生きるべきかを考え行動することがで
きることを目的とする。

1. 「よりよい、より平和な世界とは ～私たちの生きたい未来～」

グローバル探究基礎の授業開きとして、学校のミッ
ションを確認し、自分たちが生きたい未来をファミ
リー（グループ）で制作した。互いのイメージを共有
しつつ、現在の世界・社会における持続可能性を阻害
する問題への気づきなどにつなぐ。



2. 「食を通して考える、私たちと世界とのつながり」

旭川市旭山動物園・認定NPO法人ボルネオ保全トラ
スト・ジャパンと協働し、ボルネオ島のパーム油プランテーションの拡大による野生動物の
生息地の減少について考える。

1. ボルネオ島の生物多様性

ボルネオ島のすばらしさ（生物多様性の宝庫・民族文化の多様性）についてファミ
リーで調査し、ポスターセッションを行った。旭川市旭山動物園とオンラインでつ
ながり、ボルネオオランウータンの生態について学んだ。

2. 食品パッケージ調査

家庭で毎日食べている食品パッケージを回収し
（保護者の協力のもと）、それらの食品の原材
料調査を行い、ボルネオ島で収穫されるパーム
油がいかに私たちの暮らしを支えているかを認
識した。旭川市旭山動物園とオンラインでつな
がり、ボルネオ島で起こっている現状（オラン
ウータンやボルネオゾウなどの野生動物の生息
地の現状）について知った。



3. 分断ゲーム

本校GCC（Global Citizens Club）が旭川市旭山
動物園・認定NPO法人ボルネオ保全トラスト・
ジャパンと共同制作した分断ゲーム（ボード
ゲーム）を用い、ボルネオ島でのプランテー
ション拡大による野生動物生息地の分断と、そ
の分断が私たちの日々の暮らし（食生活）と密
につながっていることを再認識した。制作に携
わった卒業生がゲストティーチャーとして授業
をし、自分たちの「つかう責任」への思いを後
輩たちに伝えてくれた。



4. 「パーム油白書」よりデータ分析

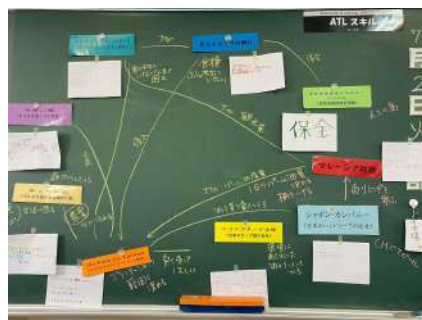
認定NPO法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン制作「パーム油白書」を用い、同法
人事務局長から「パーム油白書」を制作する意図などを聞き、なぜパーム油が多用
される油なのか、なぜボルネオ島で多く生産されているのか、他の油で代用できな
いのか、などをデータから分析した。

5. ロールプレイ

パーム油を取り巻くさまざまなステークホルダーの立場に立って多角的な視点でこの問題を考えた。自分自身は「パーム油を使う人」であるが、さまざまな人の立場に立つことで、問題の複雑性や「パーム油を使わない」など単純な解決策は成立しないことを知った。

6. 「つくる責任・つかう責任」

さまざまな学びや気づきから、「パーム油をつかう人」としてどのような「責任」ある行動ができるかを考え、宣言した。夏休みを通して挑戦し、その成果をクラスで報告しあった。



3. 「衣を通して考える、私たちと世界とのつながり」

1. 自分の「着るもの」への意識

自分が着るものをどのように選んでいるか、生活に必要な着るものの枚数と実際自分が所有する服の枚数を比較した。その理由や環境への負荷などにも結びつけて考えることができた。

2. 「着るもの」調査

実際に自分たちが身につけている季節ごとの服を持参し、その服の素材を調査した。天然素材や化学繊維などの違いに気づいたり、それぞれの素材の特徴や生産・製造される場所などについても調査した。

3. 昔の人の「着るもの」と自分たちの「着るもの」比較

国立民族博物館へ出向き、世界各地の人々が着用していた（いる）服とその素材の特徴を知り、比較した。なぜその地域でその素材が用いられるのか、服の特徴は何かなどをさらに調査した。それぞれが関心を持った地域の衣装について共有会をし、地域の気候や生産・飼育されるものとのつながりや、昔の人の手仕事についても学び合うことができた。

4. 素材調査、環境への負荷を考える

現在の自分たちが着ている服の素材（綿・麻・獣毛・化学繊維・合成繊維）について、ハンズオンで触りながら、その特徴を感じ、また、どのようにして作られているかを調べたり、その素材の特徴についても深掘りした。ファミリーごとに調べた素材について情報共有をした。

5. 「原料から布へ」工程を考える

「綿」を例にとり、「ジーンズ」が本当に「綿」からできているのか、布をほどこ、その工程を逆巻きから考えた。1枚のジーンズが作られるには多くの工程があり、た



くさんの人が関わっていることを知った。

6. ロールプレイ

「綿」から「布」までの工程に関わるステークホルダーの立場に立って、1枚のTシャツから分配される賃金について考え、グループごとの考えに基づき議論した。

「買う人」としての自分はできるだけ安く購入したいが、そうすれば「綿花を育てる人」は生活に困窮することもイメージできた。

それぞれのステークホルダーが円卓会議を開き、「オーガニックコットン」や「フェアトレード」を推奨することによってそれぞれのくらしがどう変わるかを考え議論した。

また、「買う人・着る人」としての自分はどうするべきかについても考え、共有した。

7. 「わた・いと・つむぎ」

GCCの生徒が校門前で綿花を栽培しており、その綿花等を利用して、「わたいとつむぎ」を実施した。アシスタントティーチャーを招き、「わたくり機」「わたうち弓」「つむぎゴマ」を使って、昔ながらに糸をつむぎ、その大変さや温かさを知った。できた糸で小さな織物を織ることができた。

身近なもの・毎日の生活に欠かせないものが実は世界各地とつながっていたり、世界で起きているさまざまな問題と関わっていたりすることに気づくきっかけとなる時間である。「ハッ」としたり、「ドキッ」としたり、時にはショックを受けることもあるが、遠い国や地域の問題がその瞬間にぐっと自分に引き寄せられ、自分ごとになっていく。今後のグローバル探究基礎の活動や、自分の生き方につながっていくことを期待している。



b 中学2年の取り組みの概要

中学1年時に取り組んだ探究を基本とし、それぞれが関心のある社会問題について、課題の設定も自分たちで行い、活動に結びつける。現在の社会情勢に関心を持ち、何が起きているかを知る。問題の原因を追求しつつ、自分たちにできることを仲間と協働しながら実践する。まずは行動に移すこと、問題にどうタックルできたかを振り返ることを目的とする。

1. SDGsを深掘りする

言葉は知っているが、それぞれのゴールについて、さらに169のターゲットについて深掘りした。「SDGsスタートブック」（東京書籍、EduTown）を活用しそれぞれが関心のあるテーマを選んだり、ファミリーでゴールを選び、それについて読み解いたりしながら、自分たち独自のSDGsのカードを作成した。「社会課題解決中Map（<https://2020.etic.or.jp/>）」のカードを使って身の回りの社会課題と自分の関心ごとを結びつけたりもした。



2. 新聞ワーク

新聞の読み方からスタートした。同じ日の異なる新聞を三紙読み比べ、それぞれの新聞の特徴や、異なる視点から同じニュースを読むなどした。関心のある記事を1つ選び、その内容について深掘りしたり、SDGsとの関連性や社会課題解決カードとの関連を示したりした。それぞれの関心ごとの記事を仲間に自分の言葉で伝え、お互いの感想や意見を交換した。



3. グローバル探究基礎 トライアルゼミ

6月中旬から1月初旬まで、それぞれの関心ごとに沿って「いのちと地球の調和をたもつ」「公平で公正な未来をつくる」「理解と尊重で世界をきずく」の3つのゼミにわかれ、探究活動を行った。

それぞれのゼミで数名の小さなグループ（ファミリーと呼ぶ）を編成し、自分たちが解決したいと思う問題についてその原因を調べたり、解決方法を考え、活動した。「何のために」「誰のしあわせのために」を意識した活動となるよう、授業の中でも生徒と教員が議論しながら進めた。12月には体育館において「ポスターセッション形式」で共有会を実施した。中学1年生、保護者、県内教職員に公開し、意見交換を行った。



c 中学2年プレゼミの成果と課題

1 「いのちと地球の調和をたもつ」ゼミ

生徒 24名

概要：環境、エネルギー、気候変動、減災・防災、海洋、生物多様性について関連する問題を挙げ、「大きな問題」を「身近な問題」へと落とし込んだ。そこから、生徒自身が興味関心のあるテーマを選び、ファミリーを形成した。環境や防災、生物多様性などの様々な問題に自分たちは何ができるのかを考え、行動に移した。自分たちの探究を振り返り、成果や課題をポスターにまとめ、ポスターセッションを行った。

ファミリー（グループ）での取り組み

テーマ：赤き悪魔から桜を守れ ～クビアカツヤカミキリを調査し、伝えるには～

取り組み：桜の害虫であるクビアカツヤカミキリが奈良県で急速に拡大していることを受け、桜を守るために行動をおこした。学校付近の公園に実際に出向き、クビアカツヤカミキリの被害があるかを調査し、奈良県に報告書を提出した。また、クビアカツヤカミキリによる被害をより多くの人に伝えるため、若い人にも興味を持ってもらいやすい、漫画という形で発信しようと試みた。

テーマ：奈良公園のゴミ問題

取り組み：奈良公園の鹿が地面に落ちているゴミをエサと間違えて食べてしまい、死んでしまう事件が多いことを受け、少しでもそれを防ごうと行動をおこした。実際に使用されている、鹿へのエサやり禁止の啓発ポスターが日本語しかないことに注目し、外国人にも伝わるよう、ポスターを英語に翻訳することに取り組んだ。実際にポスターを作った一般財団法人に自分たちの英訳ポスターを提供することを目標に、既存のポスターを英語に翻訳することができた。

テーマ：地震に対する知識を上げる

取り組み：地震に対する知識を上げることを目的にあげ、活動をおこなった。地震についての情報を得るために奈良県地方気象台に質問をし、自らの知識を高めた。その情報などをもとに、地震や防災グッズに関するクイズやアンケートを作成し、中学2年生を対象に実施した。その結果をポスターにまとめ、教室掲示をおこなった。

テーマ：家庭のゴミを活用する

取り組み：本校の高校生が探究でコンポストを作成し、生ゴミを再利用する活動をおこなっていたことから、自分たちでもコンポストを活用し、成果をまとめることに取り組んだ。高校生が作成したコンポストを借り、実際に家庭で出た生ゴミを入れ、分解した土に小カブの種を植え、育つかどうかを試した。その結果、みごとな小カブを収穫することができ、コンポストの利用法を自分たちでも見いだすことができた。

テーマ：フードドライブはどのくらい人々に認知されているのか

取り組み：本校の高校生が探究でおこなっているフードドライブに着目し、活動をサポートした。高校生と共に3日間、食品の寄付を募った結果、45個の食品を集めることができた。集めた食品は、フードバンク奈良の代表に渡し、フードバンクを利用している方々に話も聞くことができた。また、フードバンク実施前に、中学2年生を対象にフードバンクについてのアンケートを実施し、認知度を調べた。活動を通してフードバンクの意義を考えることができた。

テーマ：避難経路改革

取り組み：学校の各教室に掲示している避難経路は分かりにくいのではないかという視点から、見やすく・安全で・早くて・分かりやすい避難マップを作るという活動をおこなった。より早い経路や混雑しない経路を見つけるため、校内を探索し、各教室からグラウンドまでの避難タイムを計るなど、自分たちで模索した。その情報をもとに、移動教室を含めた教室からの避難マップを作成した。また、トイレにいる際に地震が起こった場合の避難方法を記したポスターを作成し、校内のトイレに掲示することにより、注意喚起をおこなった。

テーマ：保護施設について知ってもらおうプロジェクト

取り組み：動物の保護施設について多くの人に知ってもらうことを目的とし、活動をおこなった。実際に保護施設にボランティアへ行き、施設の現状を知り、自分たちに何ができるかを考えた。動物の保護施設についてのアンケートを中学2年生を対象に実施し、認知度を調べた。また、保護施設の方の話を聞いたことから、施設への支援物資を募った。新聞紙や使わなくなったペット用のおもちゃ、ウェットティッシュなどの物資を集めることができた。

成果と課題

それぞれのテーマに沿って、問題や課題を見つけ、自分たちには何ができるのかを考え、行動に移すことができた。特に、高校生や校外の組織に話を聞いたり、実際に足を運んだりなど、情報を得るためにどの生徒も積極的に動いている姿が印象的であった。それらを通して、他者と関わる力や協働する力をさらに伸ばすことができたと感じる。

反対に、ファミリーでの限られた活動時間内に予定していたことが終わらなかったり、アンケートは積極的に取るが、その結果が次の活動に十分に活かされていなかったりなど、その行動力が中途半端に終わってしまうことも多く見られた。

自分たちが定めた活動の成功規準が達成できれば終わりという訳ではない、問題や課題は解決には至っていないので、この活動の結果で満足せず、今後も様々なことにアンテナを張りつつ、中学生の自分たちだからできること、考えられることを模索してくれることを期待する。

2 「理解と尊重で世界をきずく」ゼミ

生徒 23 名

概要：国際理解、文化多様性、平和、環境、世界遺産・地域の文化財等の視点から、興味関心が似ているもの同士でファミリー（グループ）をつくり、探究テーマを決定した。理解と尊重を重視し、よりよい世界をきずくために自分たちに何ができるのかを考え、行動した。自分たちの探究を振り返り、成果や課題をポスターにまとめ、ポスターセッションを行った。

ファミリー（グループ）での取り組み

テーマ：ボルネオを救うRSPO

取り組み：パーム油を取り巻く問題の解決のため、ボルネオ島で起こっていることを多くの人（特に食品や洗剤を購入する人）に知ってもらい、購入するものを選ぶ際に意識してもらうことを期待した。登美ヶ丘地域のイベント「わいわいフェスタ」に参加し、パーム油の問題をわかりやすくまとめた紙芝居を行った。より具体的な内容をまとめたチラシも作成し、子どもたちに付き添う大人にも配布して周知した。また、紙芝居を改善したものと、紙芝居の内容をカードにし、学校の図書室にボルネオに関連する図書と共に展示した。



テーマ：イスラエル・パレスチナ あなたはどこまで知っている？

取り組み：紛争のイメージが強いイスラエルとパレスチナの印象を変えたい、それぞれの国や地域の文化についても関心を持ってもらうことを目的とし、これらの地域の料理を作り、参加者にふるまいながら、今、イスラエルとパレスチナで実際に起こっていることについても説明したり、歴史を伝えたりするイベントを行った。料理は「フムス」と「リモナナ」で、中東にルーツを持つ友だちにもアドバイスをもらい、試作を繰り返し、スライドにも工夫を凝らした。発表内容については後日図書館で特集を組んでもらい、展示される。



テーマ：外国人労働者について若者の理解を深める

取り組み：日本で働く外国人労働者が差別を受ける対象になるのは、お互いの文化の違いなどの理解不足が原因であると考えた。外国人労働者として来日する人数が多い国を複数ピックアップし、それらの国々の文化をまとめ、スライドを作成し、校内で発表を行った。

テーマ：利用しやすい購買へ

取り組み：日本に暮らす外国人の困りごとを減らしたい、という思いから、国際高校で過ごす留学生がより暮らしやすくなる学校にするには何ができるかを考えた。日本語の掲示しかない学校の購買を、留学生なども利用しやすいようにするため、どのようなものが売っているのか、いくらで買えるのかなどをまとめたパンフレットを、日本語版と英語版の2種類作成した。実際に留学生5名にインタビューし、彼らの意見を取り入れたり、パンフレットを見てもらい、アドバイスを受けたりしながら制作した。



テーマ：ロシアの魅力を知ろう！

取り組み：ロシアとウクライナの戦争が続く中、戦争の印象が強いロシアの魅力を伝え、ロシアの印象を変えたいと、ロシアの料理や文化、日本とのつながりなど、ファミリーのメンバーがそれぞれ関心のあることや魅力を感じるものをスライドにまとめ、校内で発表を行った。

成果と課題

それぞれのファミリー（グループ）で、身の回りの課題を考え、自分たちでテーマの設定を行うことができた。生徒たちは計画を立てて探究を進めていく中で、試行錯誤しながら予定を管理・調整する力が身についたと感じる。興味関心が似ているものどうしが集まりファミリー（グループ）を形成しているため、毎回の授業できちんと議論できているファミリー（グループ）が多かった。ただ、中学生にできることは限られている中で、問題の解決に向けて何ができるのかなかなか決められなかったり、自分たちのやりたいことが本当に誰かのためになっているのか、と問われると答えられなかったりして壁にぶつかることも多かった。しかし、それぞれが何か行動に移したいという意欲は高く、ファミリーメンバーや担当者との議論の中で行き詰まっても諦めることなく立ち上がる強さも見られた。ただ、準備に時間がかかったり、やり直しがあつたりすることが多かったため、行動にうつす時間が足りない様子でもあった。

このゼミでは、「理解と尊重」を目指すためか、「知ってもらふ、広める」といった解決方法がどうしても多くなった。中学生たちにできることにどれだけの深みと広がりを見出せるかが課題である。



3 「公正で公平な未来をつくる」ゼミ

生徒 24 名

概要：国際理解・平和・人権・ジェンダー平等・福祉・持続可能な生産・消費などのキーワードに関連することについて探究を行った。まず、自らの関心を深めるために「どんなことを」「どうやって」学びたいかについて考えた。それぞれのテーマに関する理解や知識が不足していることがわかったので、図書館で本を選んでテーマの現状について知る取り組みを行った。ある程度、テーマに関する理解が深まったところでファミリーをつくり、課題に対する行動を計画し、実行できるように活動した。

ファミリー（グループ）での取り組み

テーマ：情報と平和
取り組み：現在起こっている戦争に関する、不特定多数が情報を発信するSNSや、特定の国や立場に立ったマスメディアの情報が本当に真実であるのか、フェイクニュースにだまされないためにどうすればよいのかについて探究を行った。SNSの誤情報にだまされないための啓発ポスターを昇降口に掲示し、情報発信を行った。
テーマ：学生の宗教被害について
取り組み：ファミリーのメンバーが、町中で宗教関係の人に声をかけられた経験をきっかけに、若者がどのような宗教被害にあっているのか、今後宗教被害にあわないためにどうすればいいのかについて探究した。
テーマ：知的障がいのある人たちに対する不平等をなくす
取り組み：障がい者福祉や差別といったテーマに関心を持つメンバーが集まり、ファミリーとして「知的障がい」にテーマを絞って探究を行った。メンバーによって理解に差があったので、本を各自読んで共通理解を図り、自分たちが気づいていなかったようなことを、他の人にも知ってもらうために、啓発冊子の作成に取り組むことを計画した。
テーマ：LGBTQ+の人達のことを多くの人が理解するには？
取り組み：LGBTQ+について、当事者の悩みや苦しみを多くの人が理解するために何ができるのかを考えて探究を行った。10月14日に天理駅前で実施された、奈良レインボーフェスタに参加し、当事者の人たちと交流したり、11月には性同一性障害の当事者である杉山文野さんの『ダブルハピネス』を読んだり、田崎智咲斗さんにコンタクトをとって、さらなる理解を深めようとした。
テーマ：いじめや差別の問題を解決することは、世界平和につながる
取り組み：身近ないじめ問題について、自分たちなりに対策を考えてその解決を目指した探究を行った。これまでの日本のいじめ問題に関わる統計資料や事例をもとに、独自の対策マニュアルを作成した。そのマニュアルを11月27日に奈良市役所教育委員会いじめ防止生徒指導課へ持参し、奈良市におけるいじめ対策の現状と対策を聞くとともに、自分たちの作成したマニュアルに関する助言を受けた。
テーマ：性の悩みと問題
取り組み：主に「性同一性障害」について関心を持ち、自分たちが関心を持っていることや疑問に思っていることを書き出し、それらを一つ一つ整理していく方法で探究を行っ

た。それらを経て、自分たちよりも年齢の低い小学生向けの啓発ポスターを作成し、ファミリーメンバーの出身小学校へ啓発の依頼をする計画をした。

成果と課題

[成果]

- ・生徒たちは、自分たちでテーマを見つけ出し、それぞれの方法で探究を実施することができた。また、その際に書籍等を活用して客観的な根拠から問題提起をしたり現状を把握できるようになった。
- ・具体的行動を検討し、実行までのプロセスを計画することができた。

[課題]

- ・書籍の選び方や統計をもとにした問題提起について、生徒により出来に差があり探究の深まり方に違いが生まれた。
- ・具体的行動にたどり着かないファミリーは、計画段階で終了してしまった。また、校外の機関や専門家とつながるためのプロセスが生徒と共有できておらず、一部こちらへの報告なしにつながろうとした場面があった。状況を把握したのち指導を行い、先方の厚意によりインタビューを実施することができたが、事前に手順やマナーなどの丁寧な指導も必要であると感じた。
- ・テーマを絞るにあたって、時間がかかったファミリーも多く、またテーマが壮大で「自分事」としてとらえにくいファミリーも見られた。「興味があるから」だけでなく「なぜ自分がそれを探究するのか」や、「その課題をどうしたいのか」、「自分とどのように関わっているのか」について考えさせて取り組ませたいと感じた。

4.1.6. たてにつながる交流会

a 1 学期実施

第3学年の生徒は2年次から6つのゼミに分かれて探究を進めてきた。これまでも、1年間を通して、ゼミ、学年の中で探究の成果を発表してきた。この度は、探究の成果を他学年の生徒に共有し、意見交換を行う機会として、「たてにつながる交流会」を実施した。

日時：2024年5月15日（水）2、3 時間目

場所：高校2・3年生教室＋特別教室

対象生徒：高校2・3年生

使用言語：日本語

【発表について】

高校3年生については、発表するゼミの数ができるだけ均等になるように12グループに分けた。高校2年生も12グループに分かれ、それぞれの教室に入った。各教室6～7ファミリーが、自分の探究について発表した。これにより、2年生も3年生も様々なゼミの生徒の発表を聞くことができ、ゼミ内での発表よりも多彩なテーマの探究について知識を深めることができた。

【ファシリテーターについて】

会の進行を行うファシリテーターは、事前のアンケートで希望してくれた生徒を中心に、各ゼミから2組選出した。各教室に配置された2名のファシリテーターが当日の進行、意見集約等を行った。

【今回の成果と今後の課題】

高校3年生は、上級生がメインとなった「たてにつながる交流会」に参加したことはあるものの、自らが主体となって交流会を進めるのは初めてのことであった。進行に慣れていない生徒がファシリテーターを務めたこともあって、スムーズに進行できなかった教室もあった。しかしながら、参加者はファシリテーターの発言や、発表者の発言に熱心に耳を傾け、質疑応答も活発に行われたと感じられる。

今後の課題としては、以下のようなことが考えられる。

- ファシリテーターの指導（進行方法、指示の仕方等）
- 意見交換がより活発になるような発表指導（聞き手を巻き込む工夫、問いかけ方等）

上記の課題を解決できるよう、今後の授業計画を考えたい。



b 2学期実施

中学2年生のトライアルゼミで行った探究活動について、中学2年生がポスターを作成し、同学年の仲間、中学1年生、保護者、県内学校教員等が観覧した。

目的は、中学2年生が自分たちの探究活動を振り返り、課題や反省も含め、その活動を仲間や後輩と共有する、中学1年生は先輩の活動を知り、来年度の自分の活動に活かすことである。

18のファミリーが自分たちの活動や、その活動を自分たちが定めた基準で評価し、ポスターを作成した（模造紙1枚に手書き）。各ファミリーは15分間2回のポスターセッションを行うため、1つのファミリーをA班・B班に分割し、1回ずつポスターセッションを担当、1回は仲間のポスターセッションを観覧し、ディスカッションに参加した。

生徒のふりかえりには、「伝えたかったことをきちんと言語化でき、イラストを付け加えることでよりわかりやすいポスターにすることができた」「自分たちの探究活動や、取り組んだ問題について多くの人に知ってもらうことができた」「自分たちが思っていなかった意見などもディスカッションで出てきて、次の取り組みへの参考になった」などがあった。



4.1.7 世界の言語

a 世界の言語 I

全体計画（シラバス）

「世界の言語 I」では、1 年次に中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語の 5 カ国語を「聞く」「話す」言語活動を中心に 8 回ずつ学習する。

英語以外の第二外国語の学習は、複数の言語やそれを使用する多様な他者への気づきと寛容な態度の形成、複数言語の比較によるメタ言語能力（自他の言語の相対性、類似性、相違性などを意識化、言語化する能力）の向上、個人の複言語能力の言語レパートリーの拡大といった成果が期待される。

1 年次の「世界の言語 I」では、5 カ国語を少しずつ学ぶことで、その言語の魅力や楽しさを知り、2 年次で学習する言語を決定するためのきっかけとすることを目的としている。考査は実施せず、評価も点数ではなく、文章で行う。言語の違いや特徴はあるが、どの言語においても共通する学習内容は①言語の歴史、②使用地域、③発音・文法の特徴、④数字、⑤文字、⑥方言である。授業の構成は言語によって若干異なるが、概ね以下の通りである。

《授業の構成》

	内容	指導者
第 1 週（2 時間）	挨拶や日常会話	言語担当教員
第 2 週（2 時間）	自己紹介などの対話	言語担当教員
第 3 週（2 時間）	身近な内容について話す	言語担当教員
第 4 週（2 時間）	実践 実際に会話をしてみる 文化について知る	言語担当教員＋ネイティブ教員

《年間スケジュール》

各言語は 8 時間（週 2 時間×4 週間）実施。最終日はネイティブ教員との TT

	1組	2組A	2組B	3組A	3組B
4/17	今からの言語の勉強について(奈良教育大学吉村教授)				
4/19	各言語オリエンテーション				
4/24-5/24	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	スペイン語
5/29-6/21	韓国語	スペイン語	フランス語	ドイツ語	中国語
6/26-9/25	ドイツ語	中国語	韓国語	スペイン語	フランス語
9/27-10/30	スペイン語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語
11/1-11/27	中国語	韓国語	スペイン語	フランス語	ドイツ語
11/29	振り返りアンケート				

12/4	これまでの勉強と言語の選択について(奈良教育大学吉村教授)、多言語書道ワークショップ
12/6	パネルディスカッション
1/10, 1/17	韓国・韓国語特別講座 (韓国教育院)
1/15	手話講座
1/22, 1/24	選択言語オリエンテーション
1/29, 2/7, 2/12, 2/14、 2/28	各言語の文化交流: 学ぶ・する・教える
3/7	中学生とたてにつながる交流 (文化交流の発表)

奈良教育大学 吉村雅仁教授による講義（４月１７日、１２月４日）

奈良教育大学吉村教授にお越しいただき、全２回の講義を受けた。まず、初めの４月の授業では、言語と外国語学習の特徴が紹介された。５つの言語について学んだ後、日本と世界の言語についての今後の考察が示された。

最後の１２月の授業では、生徒たちに言語学習について気づいたことや、１年間で学習した５つの言語について振り返りとして、多言語書道のワークショップを行った。生徒が自身自身の多言語書道作品を作成した。

多言語書道の作品



パネルディスカッション（１２月６日）

２学期の最後の世界の言語I授業では、ネイティブ教員を含む、世界の言語担当教員が、それぞれの言語学習経験や日本での多言語話者としての生活について発表した。これは、生徒が来年どの言語を勉強するかを選択するのに役立ち、また外国語使用者としての将来について考える機会となった。

韓国・韓国語特別講座（１月１０日、１月１７日）

奈良韓国教育院の方と韓国人の留学生在が韓国語教員とともに、本校の海外スタディツアー(令和７年２学期)に向け、韓国の文化、日常生活、マナー、サバイバル韓国語などに関する特別講義を実施した。

当日、生徒たちは、韓国の最近のトレンドや社会的な期待について学んだ。また、韓国を訪問している間に使える言葉を練習することもできた。今回の韓国・韓国語特別講座が、生徒の言語や言語学習に対する興味をより一層喚起する機会となった。

手話講座（1月15日）

奈良県立ろう学校の富山篤史先生にお越しいただき、1年生全員を対象に手話講座を行った。世界の言語では、5つの外国語を学んだが、「手話も一つの言語である」という観点から、言語に対する理解を深めるのがねらいである。

まず、聴覚障害についてのお話をしていただいた。聴覚障害者が生活の中で困っていること、どのような工夫をしているか等について話していただき、会話のためには手話が必要であることをお話いただいた。

そして、実際に手話を体験し、基本的な挨拶から始まり、数字や誕生日の表し方を学習した。

手話の体験



各言語の文化交流（1月29日、2月7日、12日、14日、28日、3月7日）

「外国語が話されている国・地域の文化についての理解を深める」を目的とし、文化活動の「学ぶ・する・教える」ことをした。

文化活動を学ぶ時は日本人教員とネイティブ教員の2名で指導にあたった。生徒は聞いた、見たりするだけでなく、実際に体験した。5回目の授業では、それぞれの言語グループが学んだことを教え合うことで、より言語や文化についての知識が深まったと考えられる。

今回初めて、中学生にも文化交流を開放した。今年度最後の世界の言語I授業では、中学2年生のグループが高校生の言語グループにマッチングし、2つの異なる外国語文化圏のアクティビティに参加した。高校生は「世界の言語」1年目の結果を発表し、中学生は複数の言語の学習に触れることができた。

b 世界の言語II

2年次より始まる世界の言語IIでは、それぞれの生徒が選択した言語を1年間継続して学び、基礎的な「読む」「聞く」「書く」「話す」4技能のコミュニケーション能力を身につけるとともに、言語を介して他者と意見交換を交わし、積極的に関わろうとする寛容さや挑戦力を身につけることを目標としている。言語により、細かい達成度は異なるが、共通する点としてCEFRのA1相当を目標とした。各言語共通の4技能の具体的な目標は以下のとおりである。

- ・話すこと：短く、定型的な表現を使い、自分自身の身近なことについて表現する。
- ・聞くこと：身近で日常的な内容や短く簡単な質問や発言を理解する。
- ・書くこと：身近で日常的な事柄について、簡単な語句や文を書くことができる。
- ・読むこと：よく知っている単語や基本表現を用いたテキストを理解できる。

また、学習内容や評価の方法は言語により異なるが、以下にスペイン語の概要を記す。

協働力					寛容さ・挑戦力
	話すこと	聞くこと	書くこと	読むこと	
【学習内容の概要】 ・初級文法、よく使われるフレーズを使い、読み、書き、話す、聞く力の育成 【評価の方法】 ・ワークシートの取り組み状況 ・授業内テスト ・小テスト	【学習内容の概要】 ・日常会話 ・プレゼンテーション 【評価の方法】 ・授業中の会話練習(観察) ・インタビューテスト ・プレゼンテーション	【学習内容の概要】 ・教室スペイン語 ・身近な話題の聞き方 【評価の方法】 ・授業内テスト ・インタビューテスト	【学習内容の概要】 ・自分自身や身近なものを紹介する文 【評価の方法】 ・授業内テスト ・ワークシートの取り組み状況	【学習内容の概要】 ・教科書で扱っている、日常的なテーマの会話文の読み取り 【評価の方法】 ・授業内テスト	【学習内容の概要】 ・クラスメートと日常的なテーマで意見交換をし、多様な意見があることを理解する。 ・スペイン語圏の文化、言語(方言)、価値観を学ぶ 【評価の方法】 ・授業中の取り組み(観察) ・ワークシートへの取り組み状況

c 世界の言語Ⅲ

3年次より始まる世界の言語Ⅲでは、2年次にそれぞれの生徒が選択した言語を継続して学び、基礎的な「読む」「聞く」「書く」「話す」4技能のコミュニケーション能力を身につけるとともに、言語を介して他者と意見交換を交わし、積極的に関わろうとする寛容さや挑戦力を身につけることを目標としている。言語により、細かい達成度は異なるが、共通する点としてC E F RのA 1～A 2相当を目標とした。各言語共通の4技能の具体的な目標は以下のとおりである。

- ・話すこと：①趣味・部活動などのなじみのあるトピックに関してやりとりができる。
②身近な事柄について複数の文で意見を言うことができる。
- ・聞くこと：身の回りの事柄に関連した内容や要点を理解することができる。
- ・書くこと：日常的・個人的な内容について手紙、メモ、メッセージなどを書くことができる。
- ・読むこと：簡単な語を用いて書かれた人物描写、場所の説明、文化の紹介などの説明文を理解することができる。

3年次では、履修する生徒数も2年次より少なくなるため、ペアワークやグループワークなど、より実戦的な活動を行うことができた。今年度は3年生でも積極的に海外の高校とのオンライン交流を実施し、普段の授業で学んだことを実践する機会に恵まれた。

学習内容や評価の方法は言語により異なるが、以下にスペイン語の概要を記す。

協働力					寛容さ・挑戦力
	話すこと	聞くこと	書くこと	読むこと	
【学習内容の概要】 ・初級文法、よく使われるフレーズを使い、読み、書き、話す、聞く力の育成 【評価の方法】 ・ワークシートの取り組み状況 ・授業内テスト ・小テスト	【学習内容の概要】 ・日常会話 ・プレゼンテーション 【評価の方法】 ・授業中の会話練習(観察) ・インタビューテスト ・プレゼンテーション	【学習内容の概要】 ・教室スペイン語 ・身近な話題の聞き方 【評価の方法】 ・授業内テスト ・インタビューテスト	【学習内容の概要】 ・自分自身や身近なものを紹介する文 【評価の方法】 ・授業内テスト ・ワークシートの取り組み状況	【学習内容の概要】 ・教科書で扱っている、日常的なテーマの会話文の読み取り 【評価の方法】 ・授業内テスト	【学習内容の概要】 ・クラスメートと日常的なテーマで意見交換をし、多様な意見があることを理解する。 ・スペイン語圏の文化、言語(方言)、価値観を学ぶ 【評価の方法】 ・授業中の取り組み(観察) ・ワークシートへの取り組み状況

d 異学年交流

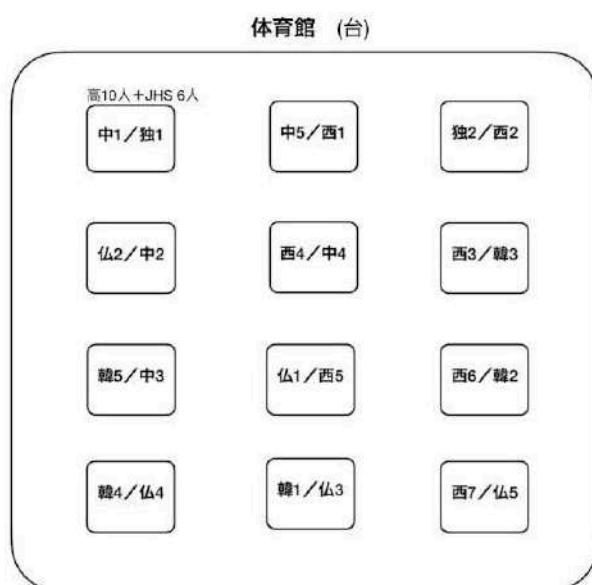
今年度初めての試みとして3月の探究週間中に高校1年生と中学2年生による世界の言語異学年交流を開催した。高校1年生の生徒が1年間を通じて学んだ5言語の基礎を踏まえて2年生以降履修する予定の選択言語の文化活動を中学2年生に対して行った。具体的な内容としては、その言語圏の歌を歌ったり、一緒にダンスやゲームをしたり、活動的な体験を多く取り入れた。今年度の異学年交流の成果と課題を踏まえ、来年度以降学年を広げて行うことも検討している。

日時: 令和7年3月7日(金)1限

場所: 体育館

対象: 高校1年生、中学2年生全員

内容: 高校1年生が1・2学期で学んだ複言語学習のまとめとして、各言語圏の文化を紹介するアクティビティを中学2年生に対して行う。中学生の段階で英語以外の多様な言語文化に触れることで、異文化理解を深め寛容性を高めることを目指す。



4.1.8 英語

a 概要

本校英語科ではそれぞれの学年において以下の科目を設定している。

学年	科目名	単位数	類型
第1学年	総合英語Ⅰ	4	全
	総合英語Ⅱ	2	全
第2学年	総合英語Ⅱ	3	全
	ディベート・ディスカッションⅠ	2	全
	EAPⅠ	2	海外進学コース
第3学年	総合英語Ⅲ	4	全
	ディベート・ディスカッションⅡ	2	全
	エッセイライティングⅠ	2	全
	エッセイライティングⅡ	2	文
	EAPⅡ	4	海外進学コース

総合英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

1クラスを2つに分けた少人数制で授業を行っている。

4技能をバランス良く学習するために、教科書（Qskills for Success）を中心に授業を進めている。1年生の総合英語Ⅱは英語ネイティブ教員が担当し、プレゼンテーションやディスカッション、ライティング指導を行っている。

ディベート・ディスカッションⅠ・Ⅱ

1クラスを英語ネイティブ教員、日本人英語教員のチームティーチングで指導している。

様々なテーマに対して自分の考えを賛成・反対・提案などのスキルを使って話すことを目標としている。授業内ではディベート・ディスカッションだけでなく、個人やグループでのプレゼンテーションを行っている。

EAPⅠ・Ⅱ

海外進学コース選択者を対象として、4技能の更なる向上を目指し、海外大学での授業の受け方や英語資格試験対策について指導している。また、様々なテーマについてディスカッション、プレゼンテーション、ディベート、スピーチ、エッセイライティングなどを行い、生徒が英語でアウトプットする機会を多く設けている。

エッセイライティングⅠ

1クラスを英語ネイティブ教員、日本人英語教員のチームティーチングで指導している。1学期には英語論文の書き方を学び、2学期にはグローバル探究で作成した日本語の論文を英語にする指導を行った。

エッセイライティングⅡ

さまざまなトピックについて、自分の意見を論理的に英語で表現する力を身につけた。

b EAP I

EAP I (English for Academic Purposes 1)は、海外進学を目指すために実行している。週2回（火・木曜日）で、約12名の生徒と本校の留学生と共に受けている。途中で2名の留学生が帰国し、留学をしに行った3名の生徒もいた。さらに、メキシコとフランスの交流会の生徒も参加でき、生徒も喜んでいて。

利用しているOUP (Lecture Ready 1) の教科書ではスピーキングとリスニングが注目されているが、授業の中で4技能等を学び、改善させようとしている。例えば、1学期に、生徒は教科書を開始する前の導入のようなレッスン「なぜ英語を勉強するのだろう」を勉強した。まず授業の流れと教科書の概念的な話題に慣れるために心理言語学の有名なTEDtalk [“How language shapes the way we think”]を視聴し、メモの取り方を習い、全員のディスカッションで重要なポイントを話し合い、自分の「英語を勉強する理由」について大学のような構成でエッセイを入力した。これが出来上がったら、生徒のペースに合わせて教科書の第1概念 (Social Psychology社会心理学) を勉強し、2学期はBusiness (ビジネス) で、3学期の最後は Humanities (人文科学) である。



当初は“U”のような姿の座席表を用意しようとしたが、教室の関係でペアとグループワークをやりやすい形に変更した。このようにすることで一人で考えることもでき、パートナー又はグループメンバーと相談しやすい雰囲気になった。特にこのようなレイアウトに設定すると交流会と新しい留学生が入りやすい。



課題はほぼ毎日あり、課題に取り組むためには毎授業のメモを取らなければならない。なぜか言うと、（特にアメリカの大学では）教科書に載せている情報だけではなく、授業の中で教員が教えることもテストに出るためだ。そして、概念と話題をきちんと理解するために、語彙を覚えなければならないので、定期的に単語テストを実施している。このテストでは単語の綴りと定義を覚えなければならない。例えば、テストでは英語の定義が書いてある

が、空欄に適切な英単語を書かなければならない。逆に、英単語は書いてあるが、英語で定義を書かなければならない空欄もあるので、語彙の綴りと定義を覚えなければならない。

Why do you study English

When I was a elementary school student, I started studying English. I didn't like English. I always hid a name tag in English class. This is because I could escape from answering questions. When I was a first grader junior high school student, I joined cram school. Then I had English tests before taking English class in cram school. I couldn't answer everything. I didn't know how to write spelling of every month in English. My English teacher was very surprised. Then I went to cram school once a week. I studied hard. My English was getting better by going to cram school. I had confidence. Also, I could get high scores on English tests. Therefore I like studying English. I didn't imagine that I go to this school now. When I decided to go to this school, my cram school teacher has changed, so she does not know that I like English and I go to this school. I would like to let her know.

I think people who can speak English are very cool, so I just would like to be like them. My life haven't changed yet because I can't speak English much. However I enjoyed doing presentations about me in E.A.P class. I have never enjoyed doing presentations before, but that time I was really enjoying doing it. I think English class is

Word	Definition
local	
	a number that represents facts or measurements
brand	
	a particular thing or situation in order to help people understand a larger idea
global	



メモと単語テストに加えて、定期的にプレゼンテーションとディスカッションテストも行っている。基本的にほとんどのプレゼンテーションテストでは概念について習ったことを発表させる。例えば、心理社会学では、人間の行動や思考が社会的環境によってどのように影響を受けるかを探究した。それで、プレゼンテーションに対して①MBTIを受けて、②自宅と学校の行動や思考も正直に考えて、③MBTIの結果と家と学校の過ごし方を比べながら本当に性格に合うかどうかを発表させた。この課題で多くの生徒は自分自身を学ぶことができ、一般的に概念も理解できた。

ディスカッションテストの件については、生徒は教科書で多様な役立つディスカッションのためのフレーズを勉強している。習ったフレーズを忘れないために定期的に活用しなければならないディスカッションテストも実施している。テストは、4問で全員が発言しなければならない。各問いにつき持ち時間は5分で、合計20分間である。しかも、テスト中に先生は手を入れられないので生徒らは他の生徒の意見を聞き、協力し、発言を出している。もし協力しなければ、問いに答えられなく、やり取りもできなく、誰も発言できなくなるため、生徒へは注意する。もしくは、一人が喋りすぎたら他のメンバーは5分間以内に発言できなくなるため意識しようという提案も前日に教える。採点する時には、意見の正しさと内容を採点する訳ではなく、現在習っているフレーズを正しく使えるかどうかを確認している。例えば、ディスカッションの入り方に役立つフレーズは“Can I add something to that?”

「おしゃったことに追加しても宜しい？」及びディスカッションの引っ張り方は“~, what do you think about that?” 「～さん、あれについてどう思われますか？」というフレーズを使っているかどうかを採点している。基本的に、生徒は楽しいやり取りと聞き取りの時間を過ごし、フレーズもよく使えているため長期記憶で覚えられるようだ。

このように、EAP Iの授業では海外の大学に挑戦しても、国内大学に行っても、「よりよいより平和な世界」のために生徒らの英語能力を向上させ、コミュニケーション能力や、挑戦力、創造的思考スキルなどを改善させようとしている。

c EAPII

週6回（月曜日・火曜日（X2）・水曜日・木曜日・金曜日） 6単位

生徒人数：11人 留学(日本)：3 留学生(マレーシア・イタリア)：2 計：16人

EAPII（English for Academic Purposes）は、海外進学を目指す高校3年生の生徒が受講するコースである。このコースは、生徒が海外の大学に進学し、英語で授業を受ける準備をするために設計されている。クラス全体で16人の生徒が受講し、そのうち10人が女子で、6人が男子です。一学期中、留学生は二人と留学に行った国際生は二人である。このコースで主に学習するスキルは、作文を書くスキル、プレゼンテーションとリスニングスキル、ノートの取り方、ディスカッションと探究のスキル、さまざまな社会的話題に関する大学レベルの文章の読み取りだ。特に作文の探究のやり方等を詳しく勉強した。



学期	月	学習活動	指導内容	指導方法	評価
1	4	教科書等	ニュージーランド交流のために国際の紹介動画（3グループ）を作成した。作文参考文献・出典	講義と個人対応	ノートチェック 動画の参加
1	5	ニュージーランド Lytton高校オンライン交流と作文と発表等	交流しながら、教科書のテーマを使って作文と発表をしました。	講義と個人対応	単語テスト作文と発表
1	6-7	教科書等	教科書の内容を進めて、英語の動画を利用してリスニングを伸ばした。	講義と個人対応	グループ発表
2	9-10	教科書とニュージーランド Lytton高校オンライン交流等	交流、グループ発表、ノートチェック等続けながら、教科書を進めました。	講義と個人対応	単語テストとリスニングテスト
2	11-12	作文と発表と3学期の準備等	3学期の作文のため、ちょっとずつ先生と相談しながら出典を集めました。	講義と個人対応	作文と発表
3	1	話題自由発表と作文等	先生と相談して作文の出典とテーマを完成させ、授業中に作文を書いて発表をした。	講義と個人対応	作文と発表

4.1.9 英語で実施する教科の設置

a Immersion Science

学習到達目標

英語による「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」の言語活動を通して、自然の事物・現象に関わり、科学と数学の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行い、自然の事物・現象を科学的に探究し、根拠を示しながら考えや判断についての確かな説明をして他に理解を得るために必要な資質・能力を育成する。

学習方法

- 実験・観察を行い、その結果について英語でプレゼンテーション、およびディスカッションをする。内容をまとめて英語で発表することで、海外大学で活用できる思考力と表現力を身につける。
- 英文で書かれた学術論文を読み、その内容を理解する。また、論文内に記された引用文献を読むことで、周辺の知識も得る。読解した学術論文の内容をスライドにまとめ、英語で発表する。英語による質疑応答もおこなうことで、科学の見方、考え方を養う。

年間学習内容

1 学期	Orientation	Immersion Scienceの学習内容の説明。科学を英語で学ぶ意義とは。
	Find Your wonder	校内を散策し、身近にある不思議を見つける。文献を検索して見つけた疑問に対する答えを調べ、発表する。
	Chirimen monster	顕微鏡の使い方を英語でプレゼンテーションする。また、そのプレゼンテーションを中学生に行い、プレゼンテーションに対するアンケートも実施した。
	Eye structure	各自が興味のあるTED talkの動画を視聴して調査し、その成果をプレゼンテーション、およびディスカッションする。
2 学期	Find Your wonder2	校内を散策し、身近にある不思議を見つける。文献を検索して内容を調べ、発表する。実際にデータを用いて説明することを心がける。
	Let's read english paper.	「Science in school」というサイトから各自が興味を持ったpaperを読んで調査し、その結果を全員にプレゼンテーションする。
	The relationship between taste and vision	「Let's read english paper.」の取り組みの中で、色覚と味覚の関係性についてのpaperを調べて発表した生徒がいたことから、生徒たちの中で「確かめてみたい」という意見が出たため、から揚げに食紅などを使って着色を行って比較実験を行った。
	Squid dissection	イカの解剖を行い、レポートにまとめた。
3 学期	Free Presentation	1年間学習してきた感じたことなどを各自プレゼンテーションした。

生徒の感想

- 普段のただ座って話を聞くスタイルではなく、実験やグループでの話し合いが多かったので楽しく学べました。
- 基本的に「自分で考えて行動」することが多かった授業だったので、自分の授業に対する主体性が伸びたと思います。
- 生徒が疑問に感じたことを実際に方法から考えて検証考察を行ったことが深い学びにつながった。

b イメージン数学 **※令和7年度より実施**

1. 学習到達目標

数学を英語で学習することにより、強力な世界共通語のスキルや分析的な推論のスキル、問題解決スキルを身につけるとともに、論理的、抽象的、かつ批判的な思考も身につける。また数学を通じて、注意深く分析し、パターンや関係性を発見する能力を培うことができるほか、日常生活におけるさまざまな状況にうまく対処するためのスキルを高める。

2. 学習方法

海外の教科書を用いて、演習を基本とする授業をベースに、適宜グループワーク、プレゼンテーション、フィールドワークなどを取り入れ、論理的思考力を身につける。

3. 年間学習内容

学期	月	学習活動	指導内容	指導方法	評価
1	4	「データの分析」	・統計の基本的な考えを理解する。身近なデータを分析し、様々な角度からのアプローチを考え、課題解決を目指す。	講義 グループワーク	単元テスト 活動状況
	5・6	「2次関数」	・2次関数や三角比を用いて数量の関係や変化を表現することの有用性を認識するとともに、それらを事象の考察に活用できるようにする。 ・海外の教科書を用いて、数学を英語で学び考える活動を行う。	ロイロノートの活用	発表内容 提出物
	7	「図形と計量」			エッセイ
2	9	「ベクトル」	・ベクトルの基本的な概念について理解する。	講義 グループワーク	
	10	「三角関数・指数関数・対数関数」	・三角関数、指数関数及び対数関数の有用性について理解し、それらを事象の考察に活用できるようにする。	ロイロノートの活用	
	11	「微分法・積分法」	・微分、積分の概念について理解し、それらの有用性を認識するとともに、事象の考察に活用できるようにする。		
3	1・2	「課題研究」	・より深く学びたい分野を選び、その分野の研究、探究を進め、エッセイにまとめる。	グループワーク等	

c イマージョン環境システム ※令和7年度より実施

1. 学習到達目標

個人の行動や社会活動が環境に与える影響について文化、社会、政治的な側面から分析、議論する。また環境問題の解決に向けた取り組みにおいて個人や社会のものの見方・考え方がどのように行動意識に現れるのかを理解し、持続可能な社会の実現に向けて、主体的かつ計画的に行動できる力を身につける。

2. 学習方法

基本的な用語、知識を学習した後、ディスカッション・プレゼンテーションを中心に、生徒主体の授業を展開する。また持続可能性、環境問題に関する調査探究の実践を行い、調査対象や方法の設定、結果の分析などのスキルを練習する。

3. 年間学習内容

学期	月	学習活動	指導内容	指導方法	評価
1	4	「オリエンテーション」	・ディスカッションで求められる思考力、表現力、英語力をどのように向上するかについて、海外大学で主に用いられる文系科目の題材を用いた実践を通して学ぶ。	講義 ディスカッション プレゼンテーション	単元テスト 活動状況 発表内容 振り返り
	5	「グローバル社会」	・世界がどのようにグローバル化してきたのか、それにより人類が共通して直面している問題について議論する。		
	6				
	7	「環境と発展」	・環境問題への対応と社会の発展のバランスについて議論する。		
2	9	「言語・文化・環境」	・言語が思考や文化に与える影響をふまえ、同じ事象であっても話す言語によって見方・考え方に違いが生まれることを理解し、それが環境問題への行動意識にどう現れるのか考察・議論する。	講義 ディスカッション プレゼンテーション	
	10				
	11	「エネルギー開発」	・さまざまな発電方法について理解を深め、持続可能なエネルギー開発の可能性について議論する。	アンケート	
3	1	「気候変動」	・気候変動の問題について個人または社会の活動が与える影響について議論し、具体的な解決的行動を導き出す。	講義 ディスカッション プレゼンテーション	
	2			アンケート	

4.1.10 学際的な学び

a 中学1年 中学校IDU（「言語と文学」×「理科」）

目的

物事を多面的に見ることは、現代社会の複雑な問題を解決するために欠かせないスキルである。一つの視点だけで判断すると、全体像を見失い、誤った結論に至る可能性がある。科学的視点と文学的視点は、一見対照的で異なるものと捉えられがちだが、両方の視点を統合することで、課題を包括的に理解し、創造的な解決策を導くことができる。

科学は「事実」や「理論」を基盤とし、データや証拠に基づき論理的に判断する力をもつ。一方、文学は「感情」や「価値観」、「創造性」に焦点を当て、人間の価値観や文化を創造的に表現し、深い理解をうながす力をもつ。たとえば、気候変動のようなグローバルな問題では、科学が原因や現象を客観的に明らかにする一方で、文学はその影響が人々に与える感情や文化的な意味を創造的に表現し、深い理解をうながす。

この授業では、日本で最初に書かれた文学作品である「竹取物語」を、科学的視点と文学的視点を融合させ、新たな角度から読み解くことを目的とする。「竹取物語」には、文学的に価値観や文化を深く考えさせるだけでなく、科学的な考察が可能な要素も含まれている。生徒がこの物語を深く理解する過程で、2つの視点を融合するスキルを獲得することを目指す。

総括的評価課題について

「あなたは公共図書館の司書です。昨今は本離れが進んでおり、貸出冊数も利用者も減っています。本好きな人を増やすために、「文学に関するあなたの疑問、司書がズバリ答えます!」という企画展示コーナーを図書館の一角に作りました。これは図書館の利用者が文学に関する素朴な疑問をポストに提出し、その答えを司書として様々な本を参照しながら答えるという企画です。結果として、本好きな人を増やしたいと考えています。

ある日、『竹取物語』を科学的な視点で考えた時の疑問が寄せられました。あなたは科学的な視点・文学的な視点をそれぞれ用いながら、両者の視点を融合して答え、『竹取物語』の魅力を伝え、本好きな人を増やしたいと考えています。それぞれの視点を紹介する時には、図書館内にある様々な本も紹介したいと考えています。寄せられた疑問とともに、企画展示コーナーに掲示するメッセージを作成してください。」

【規準A】評価

- ・引用の仕方と参考文献の書き方を習得する（理科）
- ・『竹取物語』のテーマについて考察する（言語と文学）
- ・「空想科学読本」を参考に、竹取物語の特定の箇所を科学的視点で分析する。

【規準B】統合

・図書館司書として、問い合わせに対するメッセージを記入する。科学的視点と文学的視点それぞれから見た文献もしくはあなたの意見を利用者に提供するとともに、両方の視点を統合することで、竹取物語の魅力を深めるあなたなりの解釈を述べてください。

【規準C】振り返り

- ・共有会などを通して、様々な視点で自らの考えについてあらためて考察し、コメントリー（論評）を作成する。

実施内容

合計13時間で実施した。実施については、理科と言語と文学の時間だけでなく、個人探究週間を利用し、柔軟に時間割を変更して、実施した。生徒はレポート作成などを家庭で行う事ができるために、実際の取組みの時間は17時間程度を想定して計画した。

	内容
1	IDUキックオフ IDUとは 課題の説明
2	①引用の仕方

3	①文学のテーマ、概念を考える
4	②引用の仕方/竹取物語を科学的に読み解く・説明
5	③竹取物語を科学的に読み解く・レポート作成
6	②『竹取物語』のテーマを考える
7	④竹取物語を科学的に読み解く・レポート作成
8	総括の説明・総括作品作成（掲示物）1
9	総括作品作成（掲示物）2
10	総括作品作成（掲示物）3
11	総括作品作成（掲示物）4 21:00までに提出
12	発表会
13	振り返り



図書館で行った授業の様子

b 中学2年 中学校IDU（「数学」×「個人と社会」）

1. 「数学」と「個人と社会」でIDUを実施する目的

①それぞれの教科の単元の内容を合致させて深い学びを促す目的

- ・ 個人と社会の単元：日本の地域的特色
日本の自然的特色・産業・人口・資源・エネルギーなどを学ぶ。
統計データを根拠に社会課題を把握したり、分析したりする力が必要となる。
- ・ 数学の単元：データの活用
データの整理・図や表の活用・図や表の読み取り・データの読み取り
データの読み取り方や表し方を学ぶが、その力を活用するコンテンツが不足している。
上記の内容や、足りない部分を補うために、この科目での実施に挑戦した。

②探究学習などへの活用を目指す目的

- ・ 主観に基づく問題設定や課題分析ではなく、客観的な統計データを活用して、問題提起したり、自分の主張を述べる習慣をつけさせたりするために、「数学」と「個人と社会」を統合させたの学びが生かされ则认为した。

2.IDUの実施計画

【オリエンテーション】 ・ IDUの目的と最終目標・課題の説明 ・ プロジェクト「こんな奈良県になったらいいな」の趣旨・概要説明	
【個人と社会】 ・ 地理的な内容を学習（日本の自然的特色・産業・人口・資源・エネルギーなど） ・ 学習過程で、統計資料の読み取り・分析の練習を行う。 ・ 国土地理院地図、RESAS、e-statなど、統計や客観的資料の活用方法について学習する	【数学】 ・ データの代表値を求める ・ データの散らばりを表す数値を理解する → 図でわかりやすく表す ・ 『奈良県のすがた』を使って、奈良県についてデータから考える
【総括課題とその実施に向けた取り組み】 プロジェクト「こんな奈良県になったらいいな」 ①『奈良県のすがた2023ーグラフと解説で見る統計ガイドー』を活用して、奈良県の魅力・課題とその根拠をマッピングする ②ロイロノートでプロジェクト計画書を作成する ・ ロイロで作成したプロジェクト計画書をもとにPRポスターを作成する ③共有会→振り返り	

3.IDUの実施状況

①魅力・課題・その根拠のマッピング

- ・ 右写真のように、奈良県の地図を印刷した模造紙に、生徒たちが持ってる奈良県の魅力（黄色）・課題（青）のイメージを書いた付箋を貼ってマッピング。
- ・ 『奈良県のすがた2023ーグラフと解説で見る統計ガイドー』を活用して、魅力や課題の根拠となるデータを探し出して、ピンクの付箋に書いて貼る。



②ロイロノートでプロジェクト計画書の作成

計画書のレイアウトとしては、左上に奈良県の課題や魅力の現状をまとめ、プロジェクトの概要を書く。右上にその根拠となる統計資料を添付する。左下には、それらを使って自らがどのように学際的理解を深めたのかについて考察を書く。右下には、後述する共有会を経た後に、IDU全体の振り返りを記入する。

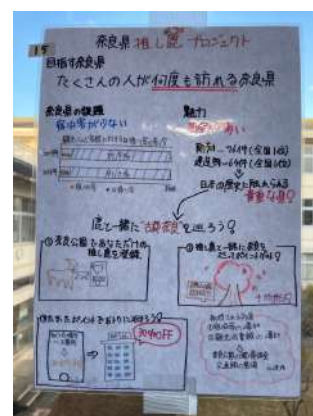
右の資料は、生徒が実際に作成した資料のうち、高い学際的理解を示しているものである。課題や魅力を統計資料を根拠に分析し、それに対応したアイデアを提案することができている。



③共有会

計画書に基づいて、A4用紙に右のようなポスターを作成し、生徒たちの名前を伏せて廊下に掲示した。それを各自で閲覧し、優秀だと思える作品を3つ選び投票させた。投票の際には、なぜその作品を選んだのかという理由を必ず書かせた。

生徒たちは、グラフや表を使ってデータを整理・分析している作品に投票している傾向があり、生徒が作品を選んだ理由には、「根拠が示されているので、課題がわかりやすい」という趣旨の内容が多く見られた。



4.成果と反省

[生徒たちの学びについて]

成果

・生徒の振り返り内容より、今回のIDUの趣旨を十分理解したのが見られた。具体的には、複数の視点で課題に取り組み、関連性について考察したり、探究活動へ生かしたりするきっかけとなった様子が見られた。

(例)

生徒A：自分自身の学際的な学びは様々な観点から事物の関連性を考えられるように発展したと考える。奈良県の課題について、私は「観光客の宿泊率が低い」とことと「南部の過疎化が進んでいる」の2つの趣旨が異なる課題をあげてどちらも解決できるようなプロジェクトを計画することが出来た。

このように、一見関係ないように見える課題でもどこかで繋がっていて、解決の糸口も共通しているかもしれないことがわかり、それぞれの事物の要因や関係性を考えられるようになった。

生徒B：数学的な視点と社会の視点で物事をみて、分析していくと、現状や根拠が明らかになっていき、課題を解決する、今までよりも妥当な改善案を考えることができ、多方面から物事を見ると、より深く妥当な分析と判断ができるようになることが学べた。また、根拠を見つけることで、よりよい判断ができたため、根拠の重要性も学ぶことができた。これらのことは、自分が今後なにかなの問題に直面したり、探究活動や課外活動などにおいても、よりよい判断ができて、より良い解決策を見つけることに役立つと考えた。

反省

・生徒は課題の趣旨を理解して取り組んでいたが、根拠となるデータを十分に示すことができず、提案も断片的で思いつきのような成果物になったものが一部見られた。

[指導者の取り組みについて]

成果

- ・他教科の視点を意識して指導に取り組むことで、生徒の学びの全体像や関連性について考えるようになり、その後の単元においても、別の教科の実施内容と関連付けようとしたり、すでに実施した内容によって得られた力を活用させたりしようという意識が生まれた。
- ・互いの教科の担当者間で連携し、またIDUコーディネーターの助言も受けながら、多くの人数で協働設計をすることができたため、あらかじめ方向性を定め、見通しを持って授業を実施することができた。

反省

- ・今回は、最終的な印象として個人と社会の内容がベースになっているような課題になった。互いの教科の学習内容を、もう少し詳細に把握し、バランスの良い課題設定をするべきなのか、もしくは今回のように、いずれかの教科をベースに実施する形でも良いのか、また検討していく必要がある。
- ・授業を実施していく過程で、計画当初から修正していったことがあるが、異なる教科間で、そうした調整をしながら修正をすることが難しかった。

4.1.11 個人探究週間の取組

本校では、定期考査を廃止し、「個人探究週間」を導入している。午前中に50分間の授業を3コマ実施し、午後は生徒が各自の探究を深める時間としている。中学校の場合、これに加えて40分間の授業を1～2コマ実施することがあるが、これは授業時間数の確保を目的としたものである。また、探究週間に実施される授業は特別に編成した時間割に基づき、柔軟に組み替えることが可能である。

以下に、個人探究週間における主な活動を紹介する。

・育友会による日本文化体験会

午後13:30より、本校作法室において、お茶の作法や和服の礼儀作法に関するレクチャーを実施した。指導は、保護者の経験者が担当した。本活動は、日本文化の理解を深め、国際的な場で日本の文化を適切に伝えられるようにすることを目的としている。探究週間では、このように午後の時間を活用した活動を計画しやすい。



・講師による特別授業

柔軟に時間割を組み換えられることを活かし、外部講師による特別授業を実施した。今回は、文化庁でジオパークを担当する講師を招き、教科と連動した講演を行った。生徒は、実験を交えながら最新の知見を学び、教科の理解を深めた。



・フィールドワーク

学年全体で奈良公園におけるフィールドワークを実施した。奈良教育大学の講師による講演を聴いた後、実際に現地で調査を行い、奈良の課題とSDGsの関連について学んだ。探究週間では、授業の設定を柔軟に行えるため、このような校外学習の計画も立てやすい。



4.1.12 授業外の学び

a 登美ヶ丘わいわいフェスタ2024

目的：

登美ヶ丘地区社会福祉協議会主催の本イベントにボランティアとして参加することで地域との関わりを深め、貢献する。主催団体を初め、地域の様々な団体、店舗、近隣の幼・小・中・大と連携することで堅固なネットワークを形成し、地域に根ざした学校を目指す。

日時：令和6年10月27日（日）9：00～16：00

場所：中登美ヶ丘近隣公園

概要：

当該イベントにおいて、本校の生徒はボランティアとして、受付、フードバンク、駄菓子屋、段ボールジェンガ（ゲームコーナー）の各ブースでのサポートを担当した。生徒たちは、各ブースの枠を超えて積極的に行動していたことが非常に印象的であった。後述の生徒の声からも分かるように、来場していたさまざまな年齢層の地域住民と直接触れ合うことを通じて、自分たちがこのコミュニティの一員であるという意識を新たにしたいと考えられる。今後も、学校内にとどまらず、地域や社会の中で奉仕の精神を養い、それを実践してくれることを期待したい。

また、イベント運営側として参加することで、生徒たちはいくつかの貴重な気づきを得たように思う。今回の経験で得た気づきは、今後の学校生活やさまざまな活動に活かすことができるとともに、生徒主体でイベントを運営する際の参考にもなると考えられる。

参加した生徒の感想：

- ・フードバンクのブースでお世話になりました。食品を持参してくださったお客様一人ひとりが、温かい心を持っていることを感じ、地域のつながりの大切さを改めて実感しました。
- ・多くの人と関わりながらボランティア活動を行う中で、大変なこともありましたが、それ以上にやりがいや達成感を感じることができ、またコミュニケーション力も向上したと感じました。
- ・もっと積極的に呼び込みなどをして活動すればよかったと思いますが、それでも少人数でも来てくれたことに感謝し、少しでも助けになれたことを嬉しく感じました。

写真1：ダンボールジェンガ補助



写真2：フードバンク



b 登美ヶ丘南公民館英語サロン

2024年10月20日に、登美ヶ丘南公民館で英語サロンが開催されました。今年で3回目の開催となります。毎年、地域の皆さんと英語活動や国際交流を楽しむために招待され、このイベントはとても楽しいものです。さまざまな年齢層やバックグラウンドを持つ人々とつながることで、私たち教師や生徒にとっても生涯学習と国際交流に対する新たな視点を得ることができます。今年も、国際理解委員会の生徒5名がボランティアで参加し、イベントリーダーとファシリテーターを務めました。

加えて、メキシコ、アメリカ、ミャンマー、ブラジル、中国からの5名の留学生が参加し、各国の伝統的なアクティビティを小グループで発表しました。ブラジルからはサンバダンス、中国からは芸術的な切り絵、ミャンマーからは言語に関する紹介など、参加者は多様なアクティビティを楽しむことができました。

イベントの後半では、参加者は留学生たちとグループになり、以下の2つのテーマについて話し合いました：

1. 海外から来た学生が日本で経験する困難や文化の違いとは何か？
2. 私たちのコミュニティで、どうすれば人々が暮らしやすくなるか？

グループディスカッションを通じて、私たちはコミュニティについて話し合い、他の視点を通じてお互いに助け合う方法について考えることができました。また、私たちがコミュニティについてどう考えているかを理解し合い、共により平和な世界に向けて成長することができる実感しました。





英語サロンのプラン

1. あいさつ
2. 留学生および参加生徒自己紹介
3. 世界旅行アクティビティ
 - ブラジル：ダンス
 - 中国：切り絵
 - メキシコ：伝統的なゲーム
 - ミャンマー：言語
 - アメリカ：カードゲーム
4. 休憩時間
5. グループディスカッション
6. 閉会/集合写真撮影

c 秋風のコンサート

令和6年10月12日に学校の中庭で秋風のコンサートを開催した。社会参加活動の一環として地域の方々に観て頂くことで、教育活動について地域の方々の理解を深めていただく。また、生徒たちにも地域社会との関わりを感じさせ、地域に貢献できる人材を育成することを目的としている。さらに、生徒が自主的に企画・運営を行ってPDCAを行うことで主体的・対話的な学びを深め、達成感を育むことも目的としている。

本年はマミーズ保育園の園児や登美ヶ丘中学校吹奏楽部、登美ヶ丘北中学校吹奏楽部にも出演していただき、地域の交流も行った。また、生徒たちからの申し出で令和6年能登半島豪雨災害への募金活動も行った。

地域の方にご来場いただけたことで、地域の方にも生徒たちの活動を見ていただけたことで、本校生徒が地域の構成員の一員として実感できたことができた。また、本年度は地域の中学生や保育園児たちと一緒に演奏することができ、地域と学校の結びつきも強くすることができた。中学生の中には、出演者の生徒と現在も交流を続けている生徒もいる。また、進行や会場設営など生徒たちが主体となって運営し、演奏会終了後にはアンケート集計や反省会も行ったことで多様な学びにつながった。

参加した生徒からは「たくさんの地域や保護者の方に来てもらえて嬉しかった」「短い準備期間でもみんなと協力できて演奏会を開催できた」「近隣の中学生と一緒に本番ができてよかった」といった感想があった。

演奏会の規模としては現在ぐらいが適切なものだと感じている。次年度以降、さらに別の近隣の中学校(鹿ノ台中学校や上中学校など)に依頼をする、あるいは奈良学園大学や小学校にも声をかけていくなど、より学研奈良登美ヶ丘地区をつなぐ行事として続けていきたい。



d withキッチンの取り組み

生徒の報告より

2024年度のwithキッチンは、実際にイベントを計画し、たくさん実施してきました。第1回目2024年3月のwithキッチン以降、プレゼン甲子園で最優秀賞を受賞された3人の先輩方(以下、先輩方)に代わり、主に在校生の生徒がwithキッチンを運営しております。活動内容を時系列順に紹介します。2024年3月第1回withキッチンは登美ヶ丘公民館で行いました。初回だったため、みんな戸惑いもありましたが、上手に地域の方と役割分担を行い、ちらし寿司と白玉団子を完成させました。地域の方も約20人ほど来ていただき、みんなで会話をしながら美味しく、作った料理を頂きました。7月第2回withキッチンは借りる日程が近すぎたため公民館を借りることができず、国際高校で行いました。午前中に授業が終わる探究週間中の放課後にクレープを作りました。ゲストとして、フードバンクでお世話になっている方をご招待し先輩方が今後のwithキッチンについて話されていました。8月第3回withキッチンは登美ヶ丘公民館でそうめん作りを行いました。『登美ヶ丘地区社会福祉協議会 チーム福カフェ』(以下、福カフェ)にご協力頂き、公民館をスムーズに借りることができました。福カフェでは、飲み物代100円だけで地域の方と雑談したり、本を読んだり、カードゲーム、ボードゲームが楽しめる場所の提供を行っている地域活動です。福カフェが公民館の調理室の部屋の隣で行われていたので、そうめんを食べに来てくださる方が通常より多く30人くらいの方の出入りがありました。10月は地域の大きな公園で「わいわいフェスタ」というお祭りがあり、福カフェからのお声かけでwithキッチンも参加することができました。福カフェと協働でポップコーンの振る舞いを行いました。チラシも印刷し、地域の方により一層広報できたと思います。また、8月のwithキッチンの後、福カフェにお邪魔した際、奈良県女性経営研究会の方とも知り合い、そこから武蔵野大学ウェルビーイング学科の准教授の方をご紹介頂き、ZOOMでお話しする機会を持ってくださいました。これからのwithキッチンについての相談やウェルビーイングについて深くお話しすることができました。

これからのwithキッチンも様々な人との出会いに感謝し、運営していきたいと思います。

左写真(8月のwithキッチンそうめん作り)

右写真(わいわいフェスタ、本校の留学生も交えて皆でポップコーンを楽しみました)



e 家庭クラブによる保育園訪問

毎年行っている家庭クラブの保育園訪問として、今年度も近隣の登美ヶ丘マミーズ保育園を訪れた。高校1年生の家庭クラブ委員6名に加え、1年生のボランティアスタッフとして8名の参加者が集まり、14名で訪問した。高校1年生にとっては初めての保育園訪問であったが、園児たちとの交流を楽しみにしながら事前の準備に取り組んでいた。

訪問当日は12月という時期を考慮し、サンタのダンスや高校生が考えたオリジナルの遊び、紙芝居、捨てられてしまった野菜をクレヨンに変身させ、お絵かきする活動などを通じて園児との交流を楽しんだ。参加した生徒にとっては、普段接することがない保育園児との交流で、貴重な時間を過ごすことができるとともに、良い刺激を受けることができた。



f GCCの取り組み

GCCはGlobal Citizens Clubの略称。高校3年生10名、2年生2名、中学1年生3名、中学1年生6名で活動している。ユネスコスクールキャンディデート校に承認されたことから、GCCでは一昨年度より国際デーを取り上げ、学校全体や地域への周知や活動への参加を呼びかけている。

1. 国際デーの取り組み「国際難民デー」

6月20日の国際難民デーに向けては、部内で学習会を行い、世界の難民について学習した。Save the Childrenや国連難民高等弁務官事務所からの資料等を参考に、ワークショップや学習会を実施した。

2. 6月21日「夏至月冬至の国際デー」

「夏至の日に夜は電子機器の電源を落とし、ろうそくのあたたかい火のもとで環境問題に思いを馳せよう」と呼びかけた。中学1年生は授業でもパーム油の問題を学習していることから、パーム油由来、石油由来の原料を避け、できるだけ環境に配慮した原料で各自がろうそくを作り、それらと呼びかけのポスターを展示した。ちょうど当日に生駒市市民会館で本校ダンス部のイベントが実施されたことから、ホワイエにも展示を行い、来館された市民にも伝えることができた。

3. 2月21日「国際母語デー」

母語を話することができる喜びを祝い、言葉や文化の多様性を楽しみたい、という生徒たちの思いから、世界で話される言語の中の、消えゆく言語について調査し、言語がなくなるといったことはどういうことか、消滅しないために私たちは何を大切にすべきかなどを議論し、まとめ、発信する予定。

4. 環境省近畿地方事務局訪問・文化祭

環境省近畿地方事務局を訪問し、現在の地球環境について学習した。私たちにできるエコ活動やデコ活についても皆で考えたり議論したりする機会をいただいた。そこでの学びを文化祭で展示発表した。中学1年生のグローバル探究で、パーム油を取り巻く問題を考える際、食品パッケージ調査を行い、そこでの「パーム油が使われている商品の多さ＝ボルネオ島の熱帯雨林の分断は私たちの暮らしと深く関わっている」という事実を高校生にも知ってもらいたいという中学生の思いと、それらの



「パッケージはゴミになる＝いかに私たちは日頃多くのゴミを出しているのかを認識する必要がある」ということも可視化したという2つの思いを形にすることにしました。自分たちの暮らしの中にあるさまざまなパッケージ（ゴミ）を持ち寄り、ボルネオ島の熱帯雨林に暮らす絶滅の危機にさらされているオランウータンを貼り絵にしてメッセージを伝えた。



5. 旭川市旭山動物園「アニマルハッピーマーケット」への缶バッジ募金

旭川市旭山動物園で毎年開催されるアニマルハッピーマーケットでは、さまざまな団体が動物の保全活動にまつわるグッズを販売するブースを出店している。今年度は本校がボルネオ島の環境問題をテーマに探究学習を行っていることから、「あさひやま動物園くらぶ」さんにお声掛けをいただき、GCCがデザインした缶バッジを販売していただけることになった。生徒が缶バッジを制作し、あさひやま動物園くらぶに委託して販売していただくという形での参加となった。生徒たちは缶バッジの制作、袋詰めなどをし、販売していただいた。経費以外の売り上げは全て、ボルネオ保全トラスト・ジャパンに寄付する。



6. わいわいフェスタ

登美ヶ丘地域のわいわいフェスタ（10月29日）では、毎年ブースを借りて、環境問題や社会問題を啓発する活動を行っている。今年は文化祭での貼り絵の展示と、ボルネオにまつわる子ども向けかるたを作り、子どもたちに楽しくボルネオ島の熱帯雨林の生物多様性のすばらしさと、そこで起こっている問題が私たちの暮らしに

深く関わることを知ってもらうことができた。かるたの文や絵も全て部員が作った。ぬり絵缶バッジ募金も行い、子どもたちにボルネオ島の動物のぬり絵をしてもらい、それを缶バッジにした。その売り上げも全て、ボルネオ保全トラスト・ジャパンに寄付する。



7. 能登半島復興支援コンサート募金活動

1月11日、本校吹奏楽部の主催で、能登半島復興支援コンサートが実施された。阪神大震災から30年の年、ロビーでの復興支援の募金活動を企画・実施した。文化祭に引き続き、今回は能登の美しい海と能登電鉄の電車の光景を、さまざまなパッケージを用いて制作することにした。美しい海や人々の景色を未来につないでいくという思いを込めて制作した。また、中学生の部員がそれぞれデザインした復興支援の缶バッジを募金してくださった方にプレゼントするという形で募金活動を行った。経費を除くすべての金額を能登の復興支援に募金する。



g 生徒会活動

①高校生議会

8月に高校生議会に出席し、奈良県の行政に対して疑問に思っていることや、高校生の視点で新たな取り組みの提言を行った。質問や提言に対しては奈良県知事や教育長から直接答弁をしていただき、生徒が政治に関心を持つ良い機会になった。議会後は奈良県の県議会議員の方々と交流会を行い、高校生が生活をする上で困っていること、またどうすれば政治に興味を持つことができるかについて意見交換を行った。

②文化祭

今年は「昭和」「タイムスリップ」をテーマに展示や舞台発表を行った。生徒会としてはオープニングイベント、幕間企画、エンディングを担当し、学校全体を盛り上げた。

③ろう学校との交流会

7月に本校で、2月にろう学校で2回交流会を行った。本校で実施した交流会では絵しりとりでろう学校の生徒と遊んだ。また手話を教えてもらい、生徒の手話に対する興味関心が高まった。ろう学校で実施した交流会ではグローバル探究で「障がい」をテーマに探究活動を行っている生徒とともに、「障がい者が災害時に避難所での生活を安心して過ごせるようにするためにはどうすれば良いか」という問いに対して本校生徒とろう学校の生徒が一緒に考え意見交換を行った。

④地域清掃奉仕活動

12月に本校の周辺の清掃活動を行った。生徒会役員が準備、役割分担等を行い、多くの生徒が参加した。



高校生議会



地域清掃奉仕活動

h フードドライブ

フードドライブに参加した生徒のレポートを以下に転載する。

私たちはグローバル探究の授業でフードロスについて探究していました。フードロスについて調べていく中で、私たちはフードバンクという存在を知りました。フードバンクとは、企業や農家から寄付された商品を、必要とする人や団体に無料で提供する団体のことで、奈良県にもフードバンク奈良という地域団体があり、そこでは家庭で余っている食品を集めてそれらを食糧に困っている家庭や、こども食堂などへ寄付するフードドライブを行っています。私たちはフードバンク奈良のボランティア活動に参加し、集まった食品を家庭へ送るために食品を箱にパッキングする作業を行いました。また、フードバンク奈良の理事である小南さんへインタビューを行い、主にどこで活動しているのかや、どんな方々が寄付に来られるのかなどを聞きました。インタビューの中で、高校生の自分たちができることを質問した際、フードドライブをより広めるためにフードドライブを国際高校で実施する案がでて、自分たちで実際にフードドライブ開催したいと思いました。

実施するにあたっての準備としては、日時をフードバンク奈良と打ち合わせをしたり、探究メンバーだけでは人数が足りなかったため、他のゼミでフードロスについて探究しているグループに協力を依頼をしました。また、たくさんの協力を得て食品を集めるためにはどのように工夫をしなければいけないかなどを考えました。

そして実施方法は各クラスにフードドライブの案内ポスターと寄付できる食品の可否が書かれているポスターを掲示しました。また、フードロスの現状とフードロスについて放送を行い、フードドライブ前日に箱を昇降口に設置しました。食品は二日間にわたって集め、集まったものはフードバンク奈良が回収してくださいました。そして、6月20日、21日行った第一回フードドライブでは22,4kg、9月25日26日に行った第二回では25kg、11月26日27日に行った第三回では11,8kgの食料が集まりました。食品を寄付してくれた方々のおかげで約60kgの食品を食料に困っている方たちへ送ることができました。

最初に学校でフードドライブを開催した時はあまり食品は集まらないものだろうと考えていました。しかし、多くの生徒が食品を寄付してくれてとても嬉しく思いました。このことから自分たちの行動が社会貢献につながっているのを感じた反面、どの家でもかなりの量の食品が余っていたのだと知りました。ですが、この活動がなければ、これだけの量がそのまま食べられず廃棄されてしまうと考えると、自分たちの活動はとても意味のあることだと思いました。また、第三回では中学生がフードドライブに興味を持ち、一緒に活動しフードロスの現状を身に染みて感じてもらいました。私たちが初の試みではあったものの協力してくれる後輩もできたため、次の世代にもこの活動が引き継がれて行くことを願い、もっと多くの人に知ってもらいたいと思いました。余った食品を捨てるのではなく寄付するという方法があることを、学校の生徒だけでなくもっと多くの人に知ってもらいたいと感じました。この活動を通して、食品が捨てられることなく、必要としている人々に届くよう願いたいです。探究活動を通して得られた何事にも実際に行動に移す力をこれからも自分たちの成長へ繋げていきます。



i ASPnetの活動への参加

文部科学省、大阪公立大学、大阪・関西ユネスコスクール（ASPnet）ネットワーク主催・共催の、2024年度ユネスコ未来共創プラットフォーム事業「近畿・北陸地域ASPnet校学び合い交流会実施要項」に中学2年生12名が参加した。

第1回ワークショップ 7月6日

参加校の紹介や、ESDとは何かを、学校や校種が異なる、またバックグラウンドも異なる児童生徒がファミリーを形成し、互いの言葉に耳を傾けあった。

「今回の目的：能登半島地震の経験から、「支え合う」ということはどういうことかを考える」を皆で共有した。



第2回ワークショップ 7月27日

能登半島地震についてそれぞれが調べてきたことをファミリーで共有した。家族から聞いたことや、自分が調べたことなどを話し合った。その後、大阪公立大学の伊藤嘉余子先生より、震災時の支援の様子や、現地で被災された方の心の様子などについて詳しく話を伺った。避難されている方々の状況は私たちからは想像できない思いをされていること、ボランティアや支援をする際にも配慮しなければならないことも学んだ。



第3回ワークショップ 8月3日

夏休み中に能登半島へ合宿に行く人もいるが、行かない人もいるため、自分たちの思いを伝えるための動画をみんなで作った。何を伝えたいか、どのような表現をするか、同じ学校の生徒が協力しながら動画を制作した。

第4回振り返りワークショップ 9月3日

能登半島で合宿をしてきた生徒の体験を聞いたり、動画を見たりした。「支え合う」ことの大切さを学んだ今回の学び合い交流会であったが、それらをさまざまな形で表現した。ESD劇団、短歌、漫画、絵日記などで表現した。



4.1.13 図書館の取り組み

今年度本校図書館はその取り組みと実績が認められ、文部科学省の「令和6年度子供の読書活動優秀実践校」に選ばれた。

a 推し本 5 minutes

目的: お薦めの本を持ち寄ってその魅力を語り合い、一番読みたい本を決める「推し本 5 minutes」の実施を通して、生徒同士の交流を深め、より読書のよさを認識し読書習慣の定着を図る。

第一回 令和6年5月8日(水) 15時から

対象: 高校3年～中学2年までの図書委員

第二回 令和6年7月2日(火) 15時から

対象: 高校3年～中学2年までの図書委員

第三回 令和6年11月6日(水) 15時から

対象: 高校2年～中学2年までの図書委員



場所: 3回とも本校図書館で実施

図書委員からの推し本（発表後参加者の投票によって図書委員からの推し本を決定する）

第一回

- ・『マッチング』内田英治著（角川ホラー文庫）
- ・『私は私のままで生きることにした』キム・スヒョン著（ワニブックス）
- ・『今宵も喫茶ドードーのキッチンで。』標野凧著（双葉文庫）
- ・『メソポタミアの神話（世界の神話1）』矢島文夫著（筑摩書房）
- ・『昔話法廷 Season3』今井雅子著（金の星社）
- ・『文豪ストレイドッグス 24巻』春河35著（角川コミックス・エース）

第二回

- ・『君を愛したひとりの僕へ』乙野四方字著（ハヤカワ文庫）
- ・『君に届け』椎名軽穂著（集英社）
- ・『虹色ほたる』川口雅幸著（アルファポリス）
- ・『バトル・ロワイアル』高見広春著（幻冬舎文庫）
- ・『本と鍵の季節』米澤穂信著（集英社文庫）
- ・『ダーリンは外国人』小栗左多里著（KADOKAWA）

第三回

- ・『君の思い出をください、と天使は言った』辻堂ゆめ著（角川文庫）
- ・『わが家は幽世の貸本屋さん』忍丸著（ことのは文庫）

b 奈良学園大学図書館の夏休み開放

奈良学園大学の図書館を夏期休業期間(8/5-9、16、19-24、26-31)に開放いただいた。

貸し出しは3冊まで可能で、自習室等の利用もでき、多くの生徒が期間中に利用した。

c 第11回全国高等学校ビブリオバトル奈良県大会への参加

図書委員長の木果奈さんが第11回全国高等学校ビブリオバトル奈良県大会大会に出場し、『君の思い出をください、と天使は言った』（辻堂ゆめ、角川文庫）を紹介した。奈良県内から参加者が集まり、それぞれがおすすめの本を5分間紹介したあと、公式のルールに従ってチャンプ本を決定した。チャンプ本の獲得はなかったが、聴衆を引きつける本の紹介ができた。

d 授業での図書館の活用

図書館は授業でも活用されている。例えば、中学一年生と高校一年生を対象とした英語の多読授業において英語の文献に多く触れたり、中学二年生の理科でレポートを書く際の引用や参考文献等を調べるなどの活用を行っている。

また、授業の成果を展示する場としても使用され、中学一年生では「竹取物語」の単元の成果物を、中学二年生では探究の成果として「ボルネオ島」についてまとめたものを、高校三年生では文学国語の授業において作成した「檸檬」のポップを展示した。



e 「わたしの本棚」の展示

本校で勤務している先生方の本棚を再現する「わたしの本棚」の展示を行った。生徒たちは、普段から接している先生方がどんな本を読んでいるのか、大変興味深く閲覧していた。

展示に協力いただいた先生は、4月足立先生（国語科）、5月鈴木先生（理科）、8月吉田先生（英語科）、9月村尾先生（数学科）、11月福田先生（数学科）、12月川崎先生、2月植村教頭先生である。科目をまたいでたくさんの先生にご協力いただき、生徒たちにとってもこれまでは関心がなかった分野に興味を持つきっかけになるのではないだろうか。



2月の「わたしの本棚」（植村教頭先生の本棚）

- ・『ドラえもん の理科実験 Q&A』日能研監修（小学館）
- ・『元素生活 完全版』寄藤文平著（化学同人）
- ・『ピーナツ・バターで始める朝』片岡義男著（東京書籍）
- ・『1分間でやる気が出る146のヒント』ドン・エシグ著（ディスカヴァー・トゥエンティワン）
- ・『心がやすらぐ魔法のことば』山崎房一著（PHP文庫）
- ・『海原純子の「元気な私」になれる本』海原純子著（三笠書房）
- ・『蜘蛛の糸・杜子春』芥川龍之介著（新潮文庫）
- ・『カフカ短編集』フランツ・カフカ著（岩波文庫）
- ・『1歳から100歳の夢』日本ドリームプロジェクト編（いろは出版）
- ・『新しい自分に出会う本』ジェリー・ミンチントン著（ディスカヴァー・トゥエンティワン）
- ・『葉っぱのフレディ：いのちの旅』レオ・バスカーリア著（童話屋）
- ・Robert Sabuda “DINOSAURS” Candlewick
- ・Carl Lewis “Inside Track” Simon & Schuster